

論文の内容の要旨

論文題目 日本語における修飾構造と品詞体系

氏名 加藤重広

本論文は、従来の品詞区分の再検討を行うことを視野にいれつつ、日本語における修飾現象を文法論的な観点と語用論的な観点から分析し、その構造や規則を解明しようとするものである。これまで、修飾は専ら文法論的にのみ分析されてきており、語用論的な要因を考慮したものはほとんどなかったが、本論文では、文法論的な要因だけでなく、語用論的な要因も深く関わっていることを指摘する。

本論文は、4部8章で構成され、第1部第1章では、「修飾」を検討する際の基本的な問題を検討した。特に、「修飾」を①意味的修飾、②機能的修飾、③構造的修飾に分けることを提案するなど、その後の分析を論理的に明晰に展開するための予備的分析を行った。

第2部は「連体修飾論」と題し、前半の第2章では形容動詞をめぐる問題を検討し、後半の第3章では関係節構造をめぐる問題を論じている。第2章では、形容動詞と名詞が連続的に分布すること、認知的な要因を反映して語用論的に決定される部分があること、自己意思制御性や段階性など本来意味論的な要因が語用論的な要因ともなりうること、連体修飾に現れる「な」が生産的な機能を持っていることを指摘し、形容動詞という品詞を設定して記述することの不合理性を主張した。あわせて、時制に関わる解釈が語の統語上の性質に大きく影響することも指摘した。第3章では、関係節構造をめぐる先行研究を批判的に再検討・整理し、日本語の関係節構造の分析において、内の関係・外の関係に分けることが不合理であること、その成立が語用論的な要因にかなり左右されていること、などを指摘した。あわせて、題目文化や連想照応とは完全な平行性がないこと、指示性や特色づけといった機能も考慮しなければならないことなどを示した。

第3部は「連用修飾論」と題して、まず第4章では「Xに」「Xと」「Xで」などの形式を分析した。これらの「に・と・で」は格助詞と活用語尾が連続的で、そういった区分が無効であること、それぞれが固有の意味機能を持っていることを指摘した。続いて、第5章では名詞句が無助詞で用いられる現象に着目し、これを《ゼロ助詞》と呼ぶゼロ形態が存在するとして分析し、先行研究を整理しながら、《ゼロ助詞》は語用論的に用いられ、マークされる名詞句が焦点として解釈されることを回避させる働き（脱焦点化機能）を有することを示した。第6章では、相対時称詞と絶対時称詞という区分で時称詞の直後の助詞の出現を規則化する主張が誤りであることを示し、そこでも同じように語用論的な要素が関わっていること、特に《ゼロ助詞》と同じ考え方が適用可能であることを指摘した。

第4部では、連体修飾と連用修飾の対応関係について検討し、品詞区分を再検討する作業を行った。具体的には、数量詞文における連体修飾と連用修飾の対応関係が、話者の認知を反映した語用論的なものであること、変化動詞文などを主とするそれ以外の対応については連体修飾を成立させる条件と連用修飾を成立させる条件が異なっており、一見同義に解釈できるものも厳密には同義ではないこと、などを主張した。最後に、これまで名詞・形容動詞（の語幹）・副詞（の一部）・連体詞とされてきたものの多くをより精密に記述する方法を提案し、これらを一括して一つの品詞として扱うことを主張した。